

18歳意識調査 「第35回 - コロナ禍とストレス -」 統計分析結果報告書（速報版）

日本財団 2021年3月25日

分析実施：一般社団法人社会調査支援機構チキラボ

ストレス反応への影響

目的

- コロナ禍で生じた生活の変化は、どのようにストレス反応（ストレスによって引き起こされがちな不安や思考力の低下など）と関わっているか？を検討する
- 性別、緊急事態宣言の対象地域に居住しているか、の影響も同時に検討する

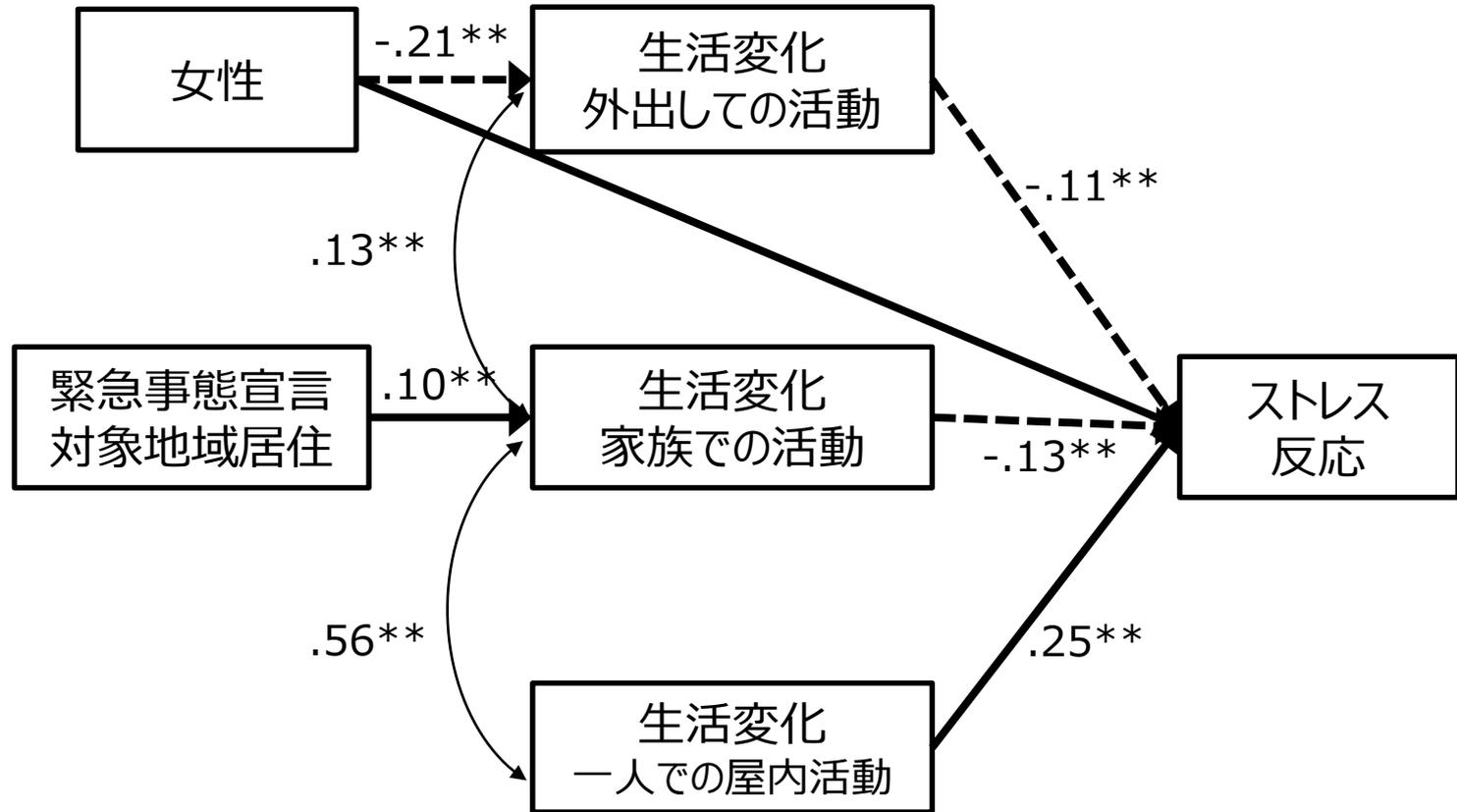
分析に用いる要素

- アウトカム（ターゲット）
 - ストレス反応
- 説明に用いる要因
 - 性別
 - 過去一年間の生活の以前からの変化
 - 居住地の緊急事態宣言発令の有無
- 統計的に影響を取り除く要因
 - 現在の立場（高校3年生で進路未定、高校3年生で進路決定済み、高校後の教育課程に在籍、就労者、など）

指標の作成

- ストレス反応
 - カテゴリカル因子分析という手法を用いて、多肢選択の結果から単一の「ストレス反応得点」を作成
- 生活の変化
 - 因子分析という手法を用いて、過去一年間の生活の変化を3つの指標に要約。
 - 「一人での屋内活動」「外出しての活動」「家族との活動」

構造方程式モデリング



統計的に有意だったパスのみを図示した。実線は正（一方が大きいと他方も大きい）、破線は負（一方が大きいと他方は小さい）の関連性。

得られた知見：生活の変化とストレス反応

- 「一人での屋内活動」は概して増加
 - 増加した人ほど、ストレス反応が大きかった
- 「外出しての活動」は概して減少
 - 減少した人ほど、ストレス反応が大きかった
- 「家族での活動」は概して増加
 - 増加した人ほど、ストレス反応が小さかった

⇒つまり、コロナ禍における生活の変化には、ストレス反応を増加させる変化も減少させる変化もあった

得られた知見：性差

- 女性は男性に比べてストレス反応が強かった
 - コロナ禍によるもの？それ以外の要因による性差？
- 女性の方が「外出しての活動」が減少
 - この要因を介してストレス反応が高いという関連性も
 - 女性の方が「外出しての活動」が減少したのは…
 - 感染抑制に協力的であった？
 - 自身や家族が感染することへの警戒心が強かった？
 - コロナ禍が始まる前のベースラインで友人との活動が多かったため影響を受けやすかった？

得られた知見：緊急事態宣言

- ストレス反応とは関連なし
 - 緊急事態宣言が発令されてから回答までの期間が短かったため影響を検出しにくかった？
 - コロナ禍以外の地域差（緊急事態宣言の対象都府県は人口が多く若者にとって好ましい環境であるといったような）に打ち消されてしまった？
- 生活の変化の中では「家族での活動」の増加とのみ弱く関連していた。
 - 緊急事態宣言は直近、生活の変化は過去一年間について問うたため、関連性はあまりなかったのかもしれない
 - その上で、回答者の多くが在籍する教育機関での対応や自粛要請には地域差があまりなかった一方で、回答者の養育者の職場がリモートワーク化したり時短化したりするかは緊急事態宣言対象地域だったかどうかによって左右されやすかったため、家族での活動が最も影響されやすかったのかもしれない。

閉塞感

目的

- 回答者自身が閉塞感を感じているか、回答者の周囲の人々が閉塞感を感じていると認知しているかの2つについて、基本属性とコロナ禍特有の要因（生活の変化および、緊急事態宣言対象地域に居住していたか）の影響を検討する

閉塞感を感じやすいのは？

- 「一人での屋内活動」の増加と、「外出しての活動」の減少は閉塞感の増加とも関連。「家族との活動」は無関連。
- 女性は閉塞感を感じやすい
- 緊急事態宣言は関連無し

変数名	オッズ比		95%下限	95%上限
女性	1.522	**	1.131	2.049
立場_高3（進路決定）	1.040		0.690	1.567
立場_高3（進路未定）	1.000		0.545	1.835
立場_高校後教育	1.224		0.842	1.778
立場_就労	.818		0.234	2.860
立場_訓練（浪人等）	.801		0.297	2.158
立場_特定の立場無し	.584		0.267	1.276
緊急事態宣言対象地域居住	.982		0.724	1.334
生活変化_一人での屋内活動	1.341	**	1.106	1.626
生活変化_外出しての活動	.691	**	0.591	0.807
生活変化_家族との活動	1.024		0.843	1.245
R^2	.052	**		

周囲の人々が閉塞感を感じていると思いやすいのは？

- 生活の変化は自分自身の場合と同様の傾向
- 高校後の教育課程に在学していることとの関連はあり
- 性別、緊急事態宣言は関連無し

変数名	オッズ比	95%下限	95%上限
女性	1.178	0.843	1.645
立場_高3（進路決定）	1.291	0.826	2.017
立場_高3（進路未定）	.827	0.446	1.532
立場_高校後教育	1.763 *	1.159	2.683
立場_就労	.851	0.197	3.666
立場_訓練（浪人等）	3.855 +	0.792	18.760
立場_特定の立場無し	.742	0.332	1.658
緊急事態宣言対象地域居住	1.206	0.864	1.684
生活変化_一人での屋内活動	1.244 +	0.999	1.549
生活変化_外出しての活動	.701 *	0.590	0.833
生活変化_家族との活動	1.119	0.880	1.422
R^2	.050 *		

- コロナ禍の生活

- ストレス反応を増加させる方向の変化

- 「一人での屋内活動」の増加

- 「外出しての活動」の減少

- ⇒閉塞感の増加

- ストレス反応を減少させる方向の変化

- 「家族との活動」の減少

- ⇒閉塞感を高めも低めもしない

知見のまとめ

- 大学、短大、専門学校 학생は、周圀の人々の閉塞感のみ認知しやすかった
 - コロナ禍でのリモート授業化など、影響が大きかったため、周圀の人々が困難を抱えていると認識しやすかった？
 - ただし自分自身は逆境を乗り越えられると感じているのかもしれない
 - また高度な教育を受けている人々であり、社会の問題を認識しやすかった？

結果のまとめ

- 女性の方が、自分自身が閉塞感を感じていると回答しやすかった。しかし、周囲の人の閉塞感の認知については関連なし。
 - これは立場の効果を取り除いた上でも観測された効果 = 進路そのものの影響ではない
 - ジェンダーに関する事件があった直後ということも影響しているかもしれない